21 世紀にキリストを生きる

「声なき者の友」の輪　　柳沢　美登里　「祈りの通信」　　第２６号（2023 年 12 月）

「前のものに全身を向け」

「私は、キリストとその復活の力を知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです。・・・すでに完全な者となっているわけでもありません」（フィリピ 3：10－11）。ローマ帝国時代の大都市ローマで軟禁されていたパウロは晩年、植民地だったフィリピで主イエスに従う人たちにこのように自分の願いを言い表しました。「何とかして死者からの復活に達したい。完全な者になったわけでもない。」自分を冷静に見つめ、謙虚に自らの願いを伝えながら、その実現のために「後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。」（3：13－14）と大いなる目標を見続け、託された道をマラソン選手のように走り続けることを自分に課している、とフィリピの兄弟姉妹に伝えるのです。

神の子イエス様を生涯、私の主として従う決断をして 43 年。顧みられない人々に仕える思いを与えられ、主が導いてくださる道を歩んで 33 年が経ちました。世界は大きく変化し、最貧困国だった国が経済成長の道を歩み始めています。気がつけば、「国際協力」を通して関わってきた底辺層出身の若手だったキリスト者たちも、今では 50 才を過ぎ、国レベルや地域レベルの教会、全人宣教、研修活動において中堅以上の指導者として活躍して久しくなりました。コロナで海外訪問ができない 3 年の間に、私が現場に出向き励ます時代は終わり、彼らとはインターネット経由で連絡を取り、祈り続ける者として仕える時代になったことを感じています。

昨年後半以降、海外、日本とも今後の関わりとして「次世代育成」の機会を示されています。2024 年 3 月の日本 YLG（包括的宣教のローザンヌ運動に賛同する 25 才から 45 才までの若手リーダーのため）大会では、メンターとして奉仕するように声をかけられました。また、2024 年 9 月開催のローザンヌ世界宣教会議ソウル大会では、若手サポートのために参加の道が開かれました。

この時代、全宇宙の創造主であり、そのすべてを贖いのみ業で回復へと導いておられる主は、私に、何に目を向けるように言われているのでしょうか。与えられたみ言葉です。

「あなた（父なる神）は地を訪れてこれを潤し、大いに豊かにします。神の水路は水をたたえ、あなたは穀物を備えます。あなたがそのように整えたのです。畝を潤し、土をならし、豊かな雨を注いで柔らかにし、萌え出でたものを祝福してくださいます。あなたは恵みを年の冠とされます。・・・谷は穀物に覆われています。あたり一面、喜びの叫びを上げ、歌声を響かせています。」

穀物の実りは神の豊かさを表し、被造物は人の耳に聞こえないけれど、神にははっきりと聞こえる喜びの叫びを上げるはずなのです。けれども、現代世界で聞こえてくるのは、被造物の深い呻きです。

＜気づかされた呻き苦しむ被造物＞

2011 年の大震災での原発事故以来、「声なき者の友」の輪の国内活動を通して福島に関わり、バンクーバーの教会との「相互国際協力」に導かれました。2015 年、訪問された参加者の中に園芸師の方がいました。放射能に汚染された農地の表土が延々と剥ぎ取られ、累々と黒包みが並べられているのを見てポツリと言われました。

「剥ぎ取られた 5 センチの滋養豊かな表土が形成されるのに 500 年かかるんです。」そのことばは、私の根幹を大地震のように揺さぶりました。「神が人類に託して下さった大地や被造物を軽んじ、いつの間にか快適な生活を当たり前に思っていた。その結果が今、目の前にあるのだ。」心の底から罪深さを覚えました。それ以来、地球環境の危機に対してローザンヌ運動を始め、世界の福音派キリスト教会で「被造物ケア」が推進されている重要性に目が開かれるようになりました。

＜被造物ケアに仕えるキリスト者との遭遇＞

昨年 2022 年、ご報告したように 10 月にタイで開催されたアジアからのキリスト者の牧師、実践家や神学者が集まった「Asia 2022」で、空港からのバスの乗りはぐれで一緒になった 30 代の香港系カナダ人の女性と、数時間を共にして語り合う時間が与えられました。彼女は被造物ケアの先駆けの国際キリスト教団体アロシャ、OMF、国際ローザンヌ運動の「被造物ケア」カタリストとしてフィリピンやアジアを中心に活動していました。神様に導かれたこの不思議な出会いと語り合いを通して、さらに「被造物ケア」への主の導きを感じたのです。

＜日本で始まった被造物ケアの祈り＞

2023 年の今年 9 月、7 年ぶりに岐阜で開催された「第 7 回日本伝道会議」に参加しました。その総括である『東海宣言』の祈りの中で「神の創造された麗しい世界が、罪と堕落の影響を受けてうめいています。私たちの貪りの罪を赦してください。地球温暖化や環境破壊に歯止めをかけ、すべての被造物が調和して憩う世界の実現のために、私たちを被造世界の秩序の回復に仕える管理者として用いてください。この第 7 回日本伝道会議を契機として、全教会的に環境保全の取り組みが具体化するように道を開いてください。」「主よ、私たちは国境を越えて、文化を越えて、地球規模の諸問題に取り組んでいきます。」と、祈られたのです。8 年に及んで神様は「次の道」への備えをしてくださり、語り続けられたのです。

＜「声なき者」？＞

「『被造物』は『声なき者』なのか？」13 年以上前に「声なき者の友」の輪を始めた時、創立メンバーが想定したのは「声なき人」という社会で声を上げることができない立場の方々でした。次第に、神は人間だけでなく、すべての生けるものを造られて目に留めておられ、人間の強引な営みに声を上げられず、人間が理解することばを発せられない「被造物」も「声なきもの」に含まれ、その友になることを神様は求められていると理解が深められてきました。

今夏、「声なき者の友」の輪の代表の神田師に、私に示されてきた思いを話す機会が与えられました。そして、被造物という「声なきもの」に仕えることを理解していただきました。10 月の総会で現地訪問中心の「国際協力活動」

から、「次世代育成」と「被造物ケア」の「生態系調整型農業サポート」を中核にして 2024 年 4 月から活動することを承認されました。

＜一歩踏み出す決断＞

「被造物ケア」の一つの「生態系調整型農業」。平たく言えば、大きな流れでの「自然農法」になり、化学肥料、農薬や除草剤によって表土の機能を失ってきた大地で、本来の豊かさを取り戻すために微生物などを回復し、完全でなくても、地域の総合的な生態系を生かすような農業を目指すものです。

4 年半前、洗礼以来 40 年以上の友である母教会の姉妹 S 姉が、早期退職した夫と共に農業従事者の資格がなくても受け入れた埼玉県郡部の耕作放棄地で、「生態系調整型農業」を始めました。私は以前から彼らに示されてきた農業法に神様の導きと恵みを祈り続け、できる限り励ましたいと思ってきました。その中で、まだ様々な面で苦闘する S 姉夫妻をサポートすることが、主の導きと祈りの中で示されたのです。

＜教会の信徒宣教者として継続＞

私は今まで、母教会の信徒宣教者として祈られ、支援を受けてきました。「国際協力」の働きからの転換を、教会の皆さまはどのように受け止められるだろう。私には未知数でした。

祈って現担任牧師、そして来年 4 月からの次期担任牧師と話をしました。お二人とも「被造物ケア」の働きを大切なものとして受け取って下さり、大変、励まされました。11 月には、長老会、また信徒宣教者を支える実働部の宣教委員会で証しをしました。人の魂の救いの優先を問われる覚悟で臨んだ会合でしたが、神様が造られたすべてのもの、自然・生態系をケアする働きの大切さは教会の皆さまの思いと一致し、「信徒宣教者」としての活動継続に賛同してくださいました。地球温暖化や環境破壊に歯止めをかける働きは、地域で日々暮らすキリスト者に「被造物ケア」に表されるのだと捉えていただけることが明確になった証しのときであり、皆さまの応答だったのです。

＊＊

＜2023 年 12 月「被造物ケア」4 年半を経て＞

とても暖かな 12 月の数日、来年 4 月から引っ越しする埼玉郡部を訪問しました。S 姉夫妻は 4 年半の間、地球環境と生態系の回復を主眼にする「被造物ケア」農業の小さな一端を、試行錯誤しながら取り組んでいました。その中に私の心に留まった出来事があります。借りた小さな耕作放棄地の隣に、長期には貸さないと言われた大きな耕作放棄地がありました。その地主さんは、耕作しない土地を雑草の生い茂った見苦しい状態にはしたくないと熱心に除草剤を撒き続けていたそうです。労力をかけない効率で整然と見えるように土地を維持することが当たり前の現代人には、とても便利な薬剤です。ところが除草剤で草が枯れる仕組みは、生命体である植物のアミノ酸合成の酵素の一つにその成分が付くことでアミノ酸を作れなくするものです。生命活動維持を邪魔する成分が人間を始め、微生物などに無害だと言い切れない難しさがあります。けれども、別のやり方を選ぶと草刈り労働か、土地を再び耕作する作業になります。S 姉夫妻は後者を選びました。長期に借りられなくても借り受け、除草剤を撒かれた土地で耕作を再開しました。種を蒔いても最初の年は成長が悪く、3 年経って写真（次頁）のように除草剤が薄まったところでは、菜っぱが育ち始めた一方、多く撒かれたところには成分が残

り、除草という生命体への邪魔が続いていました（奥が、除草剤が蒔かれなかった作付地）。除草剤が蒔かれた地で作付けした菜は食用ではなく、この土地の肥料にしていました。微生物が戻ってきたときの栄養分にするためです。この説明を聞きながら、「被造物ケア」は生命を支える「大地の回復」から始まるのだと深く思わされました。地球環境破壊をもたらす対策として、二酸化炭素排出を減らすことに焦点が当てられがちですが、あらゆる身近なところで人間活動による地球環境への負の影響が生じていることを思わされました。

その彼らが、4 年半経ってたどりついた見解は、微生物という生命体で大地が養分に富むためには、効率を度外視した手作業中心の働きかけが最善ではあるけれども、庭先よりはるかに広い農地での手作業で毎日ヘトヘトにならないためにバランスが必要というものでした。被造物へのいたわりの働きかけと同時に、自分たちの体のケアのために神様からの知恵で作られた機械や技術を用いることにバランスを祈り求めるのです。大型機械や化学肥料による土の硬化を避けることは、「被造物ケア」に欠かせません。けれども、効率追求で貪欲に陥らないように祈りながら、被造物のいのちが生かされるように神様から人間に与えられた知恵で開発された技術や機械を吟味し、選び取る作業も持続する「被造物ケア」のために大切な働きなのだとS 姉夫妻の地道な歩みから気づかされます。人間が作りだした機械を動かすためにはエネルギーが必要で、エネルギー生産には何らかの廃棄物（二酸化炭素、排気ガスだけでなく、やがて老朽化する装置も）がつきものだと私は原発事故から学んだのでした。究極の理想論で何の機械も使わないことを選択するなら、100 年以上前の鍬と鎌だけの時代に戻り、どれだけ働いても雀の涙ほどの土地しか耕せず、必要な量の作物を手にできないジレンマに陥るのです。

「神様は現代人に、とても複雑な状況での選択を与えられたなあ」と感じます。けれども、その選択を前にしながら、被造物も人間も最善に生かしてくださる神様に、知恵と導きを祈り求める役割が私たちには与えられていました。S 姉夫妻が 4 年半の試行錯誤の実践から導き出した、被造物ケアと与えられた知恵による機械や技術を用いるバランスの追求。どちらも不可欠なのです。このバランスを主に祈りながら、来年 4 月から「前のものに全身を向け」、この時代に示されている新たな働きの道へ踏み出そうと思います。

共に歩んでくださってきた皆さまのお祈りを心から感謝いたします。皆さまに主イエス様の降誕の恵みを心からお祈りいたします。

柳沢美登里

2023 年 12 月 15 日

「声なき者の友の輪・Friends with the voiceless International（FVI）」の働きのためにお祈り、ご支援をよろしくお願いいたします。活動報告は随時、ホームページ http://www.karashi.net でご覧いただけます。「柳沢支援」は右記へお願いいたします。　**郵便振替：名称　FVI　口座番号 00180－0－300201**